

或るつばくろの話

佐藤愛子



或るつばくろの話

佐藤愛子



講談社

或るつばくろの話

昭和四十八年十一月十六日 第二刷発行

著者 佐藤愛子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二 郵便番号一二二

電話 東京 (〇三) 九四五―一二一 (大代表)

振替 東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社国宝社

定価 六八〇円 落丁本、乱丁本はおとりかえいたします。

© 佐藤愛子 昭和四十八年 Printed in Japan

目次

或るつばくろの話 7

心中卯月の宵雨 53

おばはんの青春 105

さざん花の家 157

こたつの人 187

裝幀
||
風間
完

佐藤愛子短編集

或るつばくろの話

或るつばくろの話

快貌山金次は六尺二寸、三十八貫の巨体をかがめて、大根を切っていた。金次の巨体に比して、小浜部屋こはまの調理台は低すぎる。相撲部屋であるから家の構造、諸道具はすべて大ぶりに出来ているのだが、それでも快貌山金次の大きな手、長い脚はやたらにそのへんのものを壊したり、また自分が傷ついたりするのであった。金次は並以上に大きい上に並以上に不器用でもあったのだ。

大根を切りながら金次は思った。

——さみしいのう……

それは金次の癖である。淋しさを感じたから淋しいのう、と呟つぶやくわけではない。困ったときも、淋しいのう、という。腹が減った時もそういう。口惜しい時、癪しゃくにさわった時もそういう。考えてみれば金次はもう、十年近くもその言葉に馴染んで来た。

「大根、大きく切れよ。わかっとるな」

と磯魚いそうおがいった。磯魚は金次より七つも年下だ。三年前、中学を出てすぐにこの小浜部屋に入

ったが、今では金次を追い越して二段目にまで進んだ。この間の夏場所では新聞でその敢闘ぶりを取り上げられるほどの精進ぶりを見せた。彼が部屋に来た時は一七〇センチギリギリの背丈で痩せており、磯に打ち上げられた魚のように口をバクバクさせて喘あえいでばかりいるというので、小浜部屋後援会長である灘の酒造家の福住常太郎ふくすんつねたろうがその醜名しうなをつけた。福住会長は自らしゃれ者を気取っていて、面白くない洒落をいっては人の笑いを要求するように、見廻す癖がある。

「どや、磯魚！ ええ醜名やろう」

「はあ、全く、びったりですな」

と小浜親方は真顔で賛成して、たちどころにその名が定ったのである。

金次の快貌山という醜名も福住会長がつけたものである。金次を一目見た瞬間、

「こいつは怪貌や、そのものズバリや」

と会長はまるでこういう怪貌に会えたことが嬉しくてたまらぬ、とでもいうような勢いで叫んだ。

「怪貌山がええ。それにせえ」

しかし怪貌はあまりにもそのものズバリでありすぎるといって、小浜親方は怪貌の怪を快に変えてくれた。だが福住会長は今でも快貌を怪貌だと思っている。折角、醜名をつけてもらっても、金次の名は虫メガネで見なければわからぬ程にしか、番付ばんづけに出なかつたからである。

金次はチャンコ鍋の野菜の切り方が薄過ぎるといつてよく叱られた。自分では大きく厚く切っているつもりなのだが、いつの間にならだんだん薄くなっていつている。金次は貧乏育ちなのだ。金次を育てた叔母は、

「こうこは厚う切ったらあかん。薄う切りや。薄う、薄うやで」と金切声を上げていた。紙のように薄く切ったつもりなのに、

「なんべんいうたらわかるねん、この子は！」と平手で頭を叩かれるのだった。

金次の故郷は丹波高原、大江山の麓、由良川の谷に沿った僻村である。父は金次の生れた年に山つなみに遭遇して死に、母はその三年後になりそめの風邪がもとで死んだ。そして金次は同じ村で産婆をしていた叔母の家に引き取られたのである。

金次は曾祖父に似ているとよく叔母からいわれた。

「おじい鬼みtainな人やった」

と叔母はいった。

「山でハイキングの若い者に行き会うたら、てんぐが出たと走って逃げたそうな」

それから叔母は、さもバカにしたように唇をちよつと歪めていった。

「鬼みtainな顔して……気のあかんいうたら、話にならんのだ」

金次は鬼みtainに見えるところから、気のあかんところまで曾祖父にそっくりなのだ。ただ違

うところは曾祖父は器用な人間だったが、金次は不器用で怪力の持主だった。ある日、金次の中学校に小浜親方がやって来た。小浜親方は金次の村から山二つ越えた材木の集散地の出身者である。故郷に来たついでに大江山の麓に赤鬼の申し子がいると聞いて見に来たのだ。

金次は相撲取りになるのがいやだった。裸の男と取っ組み合つて、相手を打ち倒す自信などとてもない。金次は力持ちだったので、村の製材所の親方が可愛がつてくれていた。中学を出たら製材所に勤めて、貰った月給で叔母に恩返しをせねばならぬと思っていた。というのは、叔母の家へ来てからというもの来る日も来る日も叔母から恩返しのことを迫られていたためである。

「恩返ししなかったら相撲取りになれ！」

と小浜親方はいった。

「製材所に勤めるより、その方がよっぽど恩返しになる。なあ、おばはん。そう思わんか？」

聞かれた叔母は、

「へえ」

と答えるのも口の中。製材所がくれる月給分くらいは貰えますのやろか、と聞きたいのだが、聞く勇気がない。

「へえ」

と一言いったために、金次の人生は決ってしまった。

「へえというたんは、承知したということやない。へえ、そうですね、どないしまひようかな

あ、という氣持やったんやわ」

と後になって叔母はぼやいた。叔母は家の中ではきついが、少しかしこまった所に出ると何もいえなくなるタチなのである。

勿論、彼女がそういつてぼやいたのは、金次が小浜部屋へ入って足かけ三年経ってもまだ前相撲で負けてばかりいる頃であつた。金次が親方から貰う小遣いを、どんな思いをして儉約し、叔母のところへ送っているか、彼女にはわからぬのである。

金次はときどき、相撲をやめてくにへ帰ろうか、と思うことがある。しかしその時に思い止まるのは、くにはは叔母がいるということだった。金次が帰って来たら叔母はどんなに憤るだろう。それを思うと金次はまだここで苦勞に耐えている方がマシだという氣になるのであつた。

小浜部屋には五人の力士がいた。部屋はじまって以来、幕内力士は一人も出たことがない。今は幕下・二段目の磯魚に序二段の快貌山、あとは序ノ口二人と新弟子が一人いるだけである。小浜親方は毎月、月末になると福住後援会長のところへ借金に走った。そうして下手な洒落を聞いては無理に高笑いをし、金を借りて帰って来た。金次をクビにする話は今まで何度出たかしかない。他の部屋ならば金次はとくにクビになっていただろう。その都度金次を守ったのは小浜親方のおかみさんである。

おかみさんは金次の氣だてのいいのを愛していた。おかみさんにはシャクの持病がある。何の前ぶれもなく、突然、ミゾオチに玉が詰ったようになり、それから息も絶えんばかりの激痛が襲

う。その時金次はおかみさんの背骨をその親指の怪力でひと押しして、たちどころにシャクを直す技術を心得ているのである。金次は優しくて親切な男だった。おかみさんのシャクを心配して、夜通し寝ずに起きていることなど何とも思わなかった。またおかみさんは時々ヒステリーを起す。夫の小浜親方は女好きでラーメン屋の出前をくんだり、女中に手出しをしたりする。そんなときも金次はおかみさんのヤキモチ話のいい聞き役になった。一晩中でも「ハイ、ハイ」と聞いている。

「ハイ、ハイじゃないよ、金次。あんたちっとも熱心に聞いてないね」

「いんえ、一生懸命に聞いてます」

「そんなら、ハイ、ハイだけじゃなしに、何とかもつとほかのことをいったらどうよ。え？ 人が一生懸命に話してるのにさ。何だよ、そのタイド……親方がねえ、おかつの部屋から出て来たんだよ。浴衣の袂にふんどしを入れてさ……どう思う、金次」

「はあ……」

金次は暫く考えてからいった。

「それはきつと……ごつつう慌^{あわ}てたさかい締める間がなかったんですやろな」

2

ところで、夏場所を終ったばかりのその夕方、初夏らしく明るい夕焼の色が連子窓^{れんじ}から流れ込

んで来る台所で金次が大根を切りながら淋しいなあと呟いていた丁度その頃、本郷の高台の、街の喧噪から取り残されたような閑静な高級住宅地の一面を占める築地塀に囲まれた邸の奥座敷で、その邸の女主である阿川さだ子は長良川から飛行便で届いたばかりの鮎を着に小松作と一献くみかわしていた。

「……それでわたし、この頃、急に淋しゅうなつてねえ。今まで秋は淋しいものとはばかり思うてたけど、これから夏が来るという今頃、庭がみどりに燃え立って、空が光りはじめるこの頃こそ、一年のうちで一番淋しいときやと思うようになっていきますのや」

「はあ、それは、そうですね、旦那さんが亡うならはって三年ですもんなあ。お子たちもおらはらんし、この広いお屋敷になんば女中さんやじいやんがいてはるいうたかて、話し相手になるではなし、お一人でこうしていやはったら、そら、淋しゅうならはるのんは当り前ですわ」

小松作は女主の阿川さだ子と同郷である。さだ子が習っている常磐津の師匠の所で知り合ってからいつとはなしにもう十年來のつきあいになった。さだ子は三年前に還暦の祝いをすませたが、作は來年がそれだという。特に二人の気が合うというわけでもないのだが、偶然、郷里が同じということもあり、作は小ママでよく気がつく上に、嫁との仲が悪いところから三日にあげずさだ子の家へやって来ては、床の軸を掛け替えたり、虫干しを手伝ったり、夕飯を御馳走になったり、(日によつては昼も夜も飯を食う)芝居や踊りの会に同道したりするようになった。勿論、費用はすべてさだ子の負担である。

「あて、なんぞ、したいと思てますのや」

さだ子は象牙の箸で鮎の身をちよつと突ついてそのままじつと思案にふける恰好で、

「あて、思いつきり……したいことを……してみたいと思てますねん」

「しなはれ、しなはれ。なんぼでもしたいことしなはったらよろしおますねん」と小松作は声を高めた。

「フランスはバリーへでも行きましょか。それとも、豪華船で南極へ……」

といいかけるのを、ふと、さだ子は苛ら立たしげに遮った。

「外国旅行みたいなもの、しとうおません」

その調子がいかにも激しいので、作ははじめてきれいに身をせせった鮎から目を上げて、さだ子を見た。その視線をカッキと受け止めて、さだ子は意を決したようにいった。

「あて、男おとこさんときき合いたいと思てますのんや」

「へえ……」

と作は箸を持ったまま、ポカンとさだ子を見た。さだ子の手入れの行き届いたツルツルと細面の顔は小さくて、少し古びて黄みがかった雛人形を思わせる。その古びた雛人形の目の縁に微かに薄く紅いが射して、ええいもうヤケクソや、とでもいうようにさだ子は言葉をつづけた。

「あんな、浮気者に四十五年仕えて、何の喜びも知らんと、このまんま死んで行くのかと思うたら、あほらしいのだす。死ぬ前に、いっぺんだけ、女の喜びを味おうて、それからやないと死ん